挿花濱名之海

天

川松齋保一鳥先生撰

正凮
遠州流

挿花濱名之海

東都書肆　玉山堂梓

川松齋保一鳥先生撰

正風
遠州流

挿花濵名之海

東都書肆　玉山堂梓

花字翰中。此山人韻士之事。然文代篆隷寫。横斜曲直各有法矣。梅之清而瘦。蘭之潔而逸。須爲貞姿勁節之態。牡丹之嬌而媚。海棠之婉而麗。須爲綽約而艶之致。唯手操化權矣。

能失天趣。使単挍数房無道情。嶋川松斎一鳥挿花之法規模。貞松斎一馬翁。為剏花様杼。支依号諫密。曰物生形。標格称采。觸手生春。由是聲名騰躍于時。推之為剏枝宗盟焉。乃為

插花譜。同好於余之因喜稱也。
嘗買地數弓。某之花師。時之流
灌。或花木易備法護之。亦已然
從。風霾狼藉。旋即損折余。継
而為折採後。獲此編。乃易於儲
瓶淨室之中。隨時插換不厄風

羅示國老雨花芳駐毅遐呼。長春國亦老吾將老矣。用乎仲夏以辭曰。

長瀬寵田長梓未王文

淡雪は消やらぬ葉も梅の條に宿りて多情にて郁して
風情ある隈なき月も尾花か浪に隠れて
出棲し歌詠人の深きあやめもきれハ都の景春乃曙何
色乱れ秋の夕ぐれ移りて四時に移り行さまも木
草花の有様にて心を寄せけれ故に花を愛る
人昔より今に絶ず遠き野山にありて是を
観に抑挿花して以て種々の規矩を極めし人
しく其の道に遊びて彼法にかなひしに心を深し
爰我見るに滴りしかゝる心を遊ふに彼

篇のうちに満ちあるもたるも此の書なりけるをもて此
濱名乃海の廣く學ひ千尋乃底の深き識
細をも分ちあらはすのみ遠津あふみの流れを汲
依てこゝに分て加くハ難し　是をしらむ人
磯のまさごの限り依にはしかさハ藤屑とかゝあり
云ふ此撰濱乃志州の臣うもすべ若見知らく
ゑんとし捨てしも取てらひ學ひ乃を廣らけ
こゝも志をもて翁に学ぶらんかし

天保甲午秋

川松齋　保一鳥誌

席順不論貴賤

梅

福壽草

鳥松齋保一見

丁子菊
すのれ

鳥暁齋保一圖

仙人菊

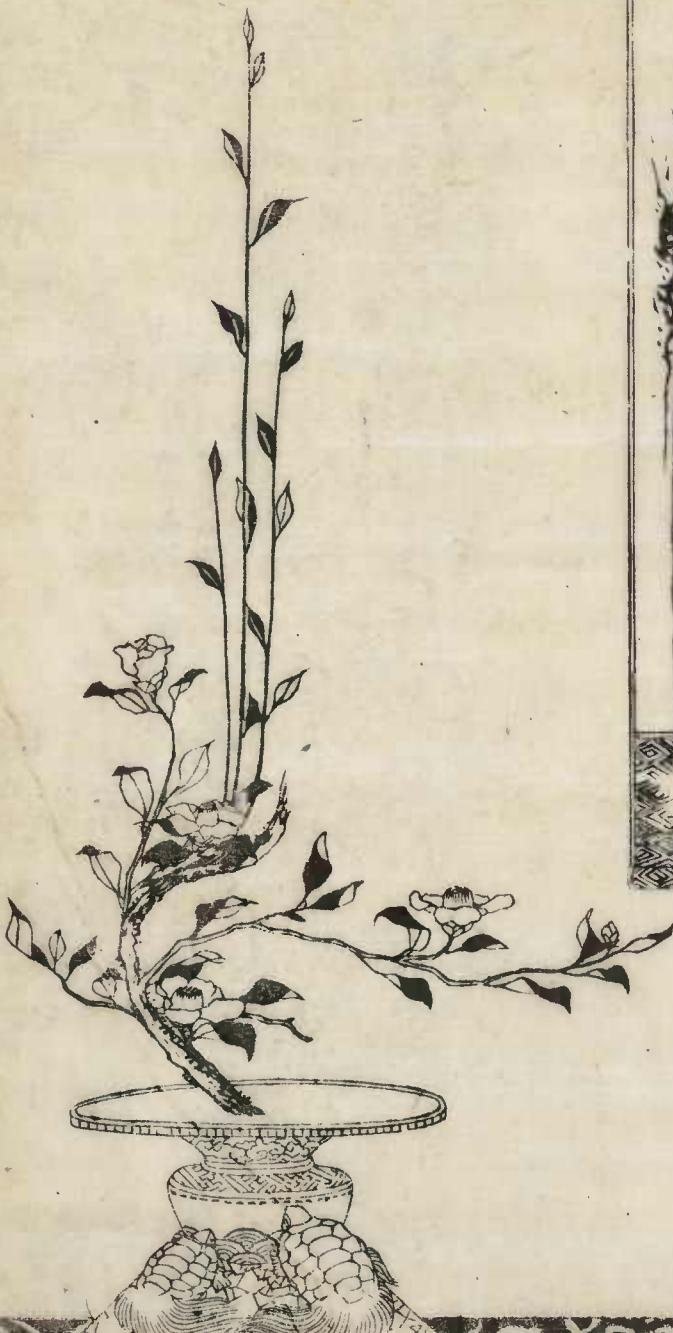
十壹輪

鳥子齋依一雄

枝垂柳
川骨

鳥孤齋小一甫

日の出

きく

北三輪

鳥感齋内一陽

著莪
しやこの

川堤齋冣一牛

與蜂相々
蝶舞

白玉椿

鳥雄齋田一英

菊
五十輪
鳥勝齋
大一政女

八朔梅

鳥雲齋中一濤

きく

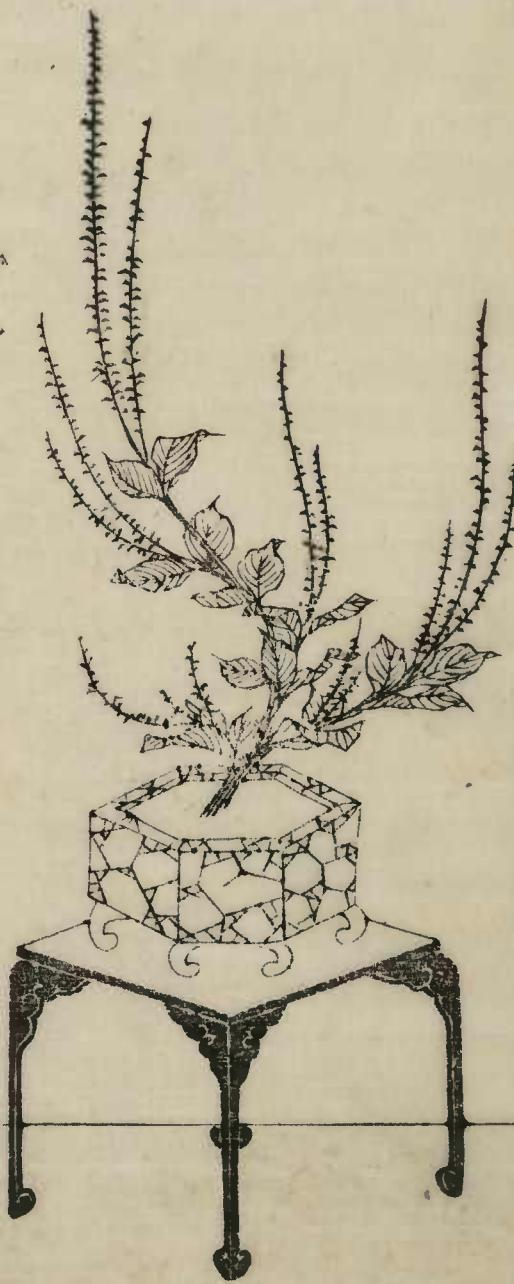
鳥柳齋吉一意

十月櫻
きく

鳥勢齋
原一房

水引

鳥群齋堤一照女

かきつさ
すゝれ

鳥昇齋保一鎌

馬蘭

十三枚

烏義齋塚一波

南天
水仙

政壽齋三一栄女

さが菊

鳥貫齋永一之

菊

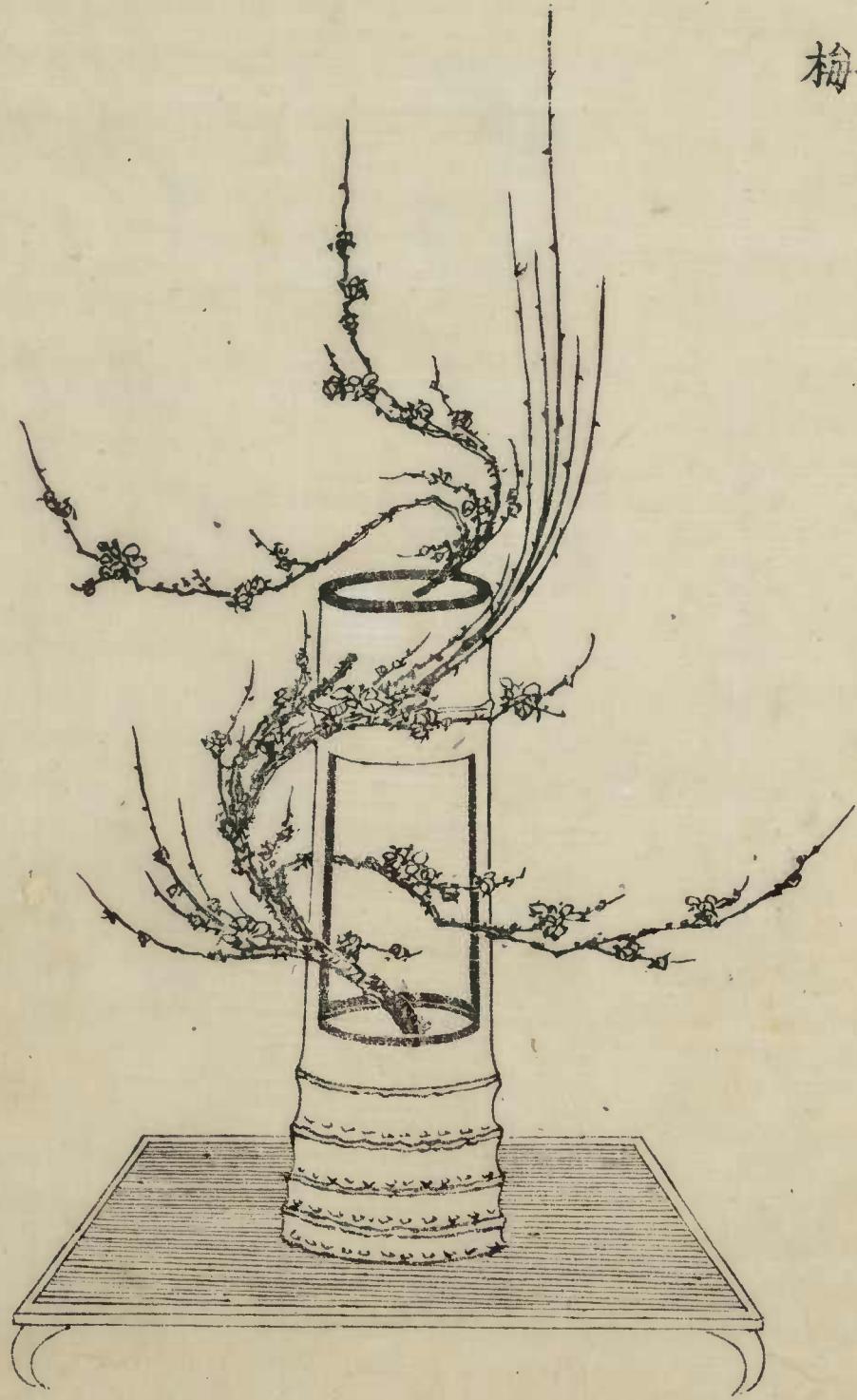
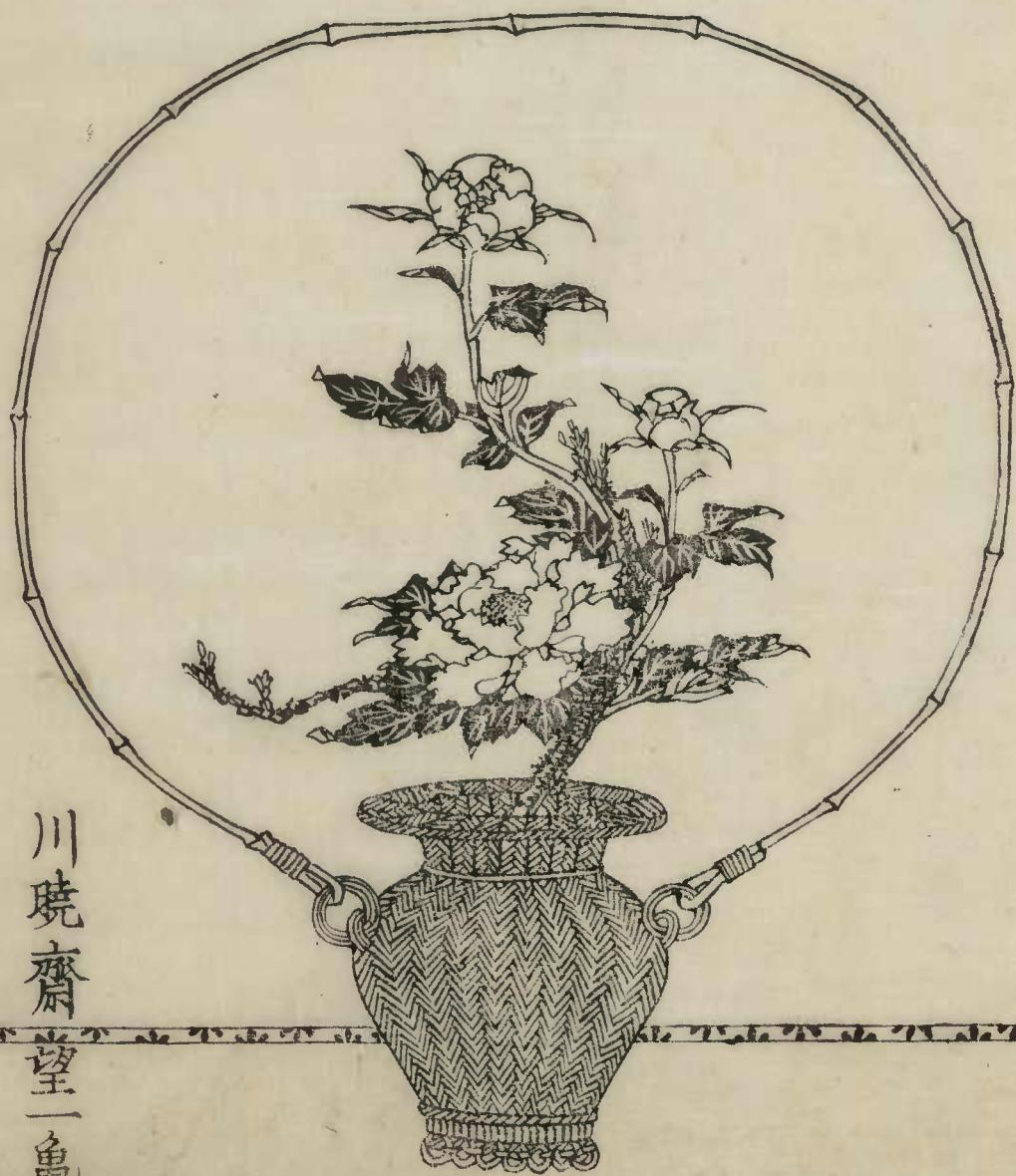
川龍齋中一表

枝垂梅

白玉椿

口傳

並一顧

梅

大一玉女

八斛獨買
一枝花
三翁精

白芍藥

烏龍齋蒔一穂

紫苑

烏蓉齋草一徑

牡丹

川暁齋望一亀

八重紅梅

金二登女

朝顔
鳥樂齋南一専

杜若

五本

塚一棠

葉らん

廿三枚

鳥道齋氷一人

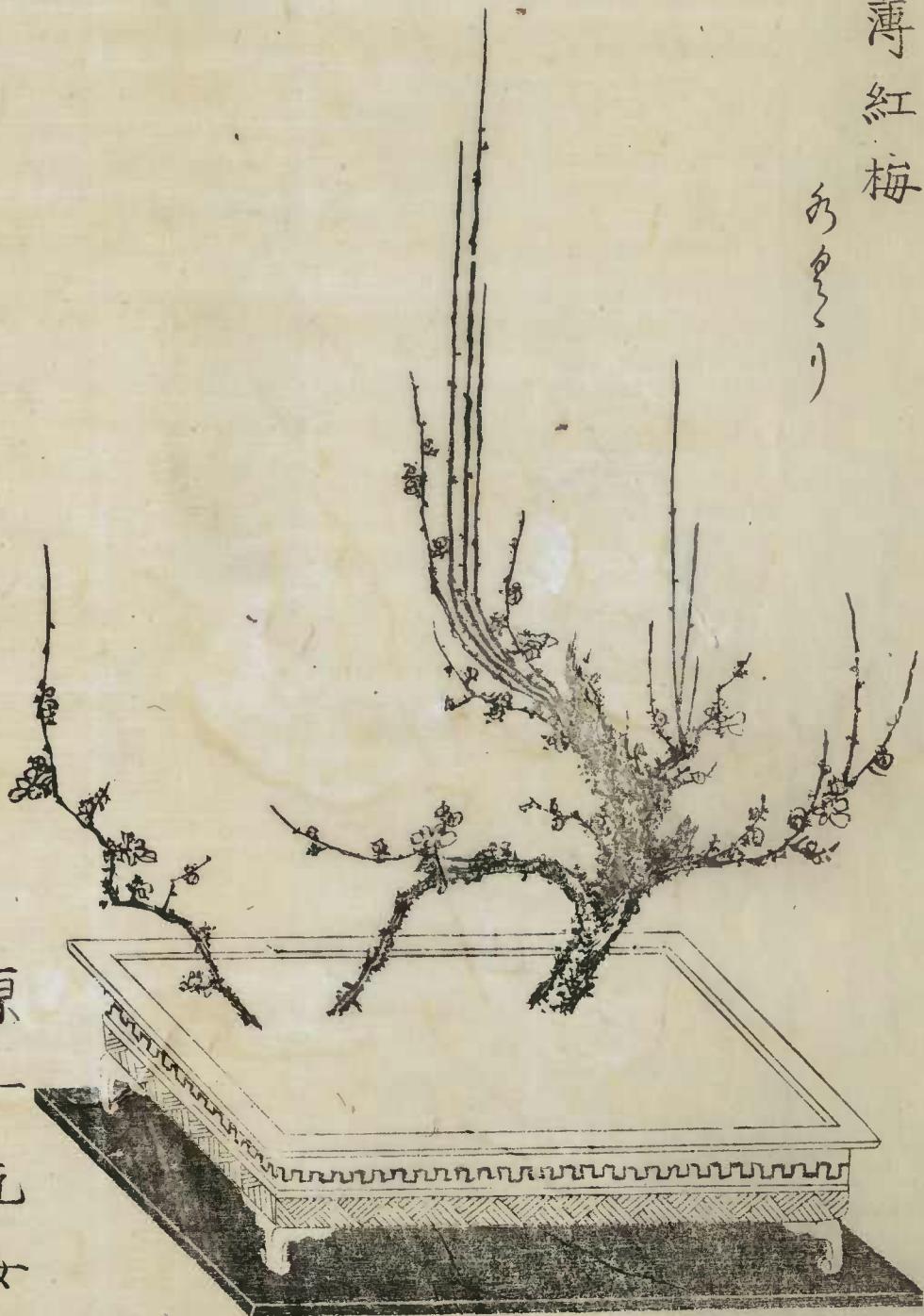
みしほ
きく

十三輪

谷一規女

万年青
氷一糸

薄紅梅

ひめくり

原一元女

芍薬
十壹てん
大一車女

湯殿山菊
十三輪

花器
古道齋作

川松齋
保一鳥